

皆さん、おはようございます。今日で令和三年度が終わります。今年度もコロナ禍の中、制限の多かった学校生活でした。集会も放送ばかりで、皆さんの前で話をしたのは、一学期の始業式、入学式と運動会だけでした。そんな苦しい高校生活について、卒業した三年生は、「暗闇の中で明かりを求めて進んだ高校生活だったけど、苦しんだ自分たちだからこそ、得られたもの、成長できたものがあった」と語ってくれました。そんな力強い卒業生の言葉を聞いた時、私は冬季オリンピックで、スピードスケートの小平奈緒選手が語った言葉を思い出しました。大会前に足首をねん挫した小平選手は、絶望的な状況の中で、自分にできる精いっぱい滑りをしようと大会に臨んでいました。結果はメダルには届きませんでしたが、レースの後、小平選手は「成し遂げることはできませんでしたが、やり遂げることはできました」と語ったのです。皆さんにとっても、苦しみの多い一年間であったと思いますが、振り返ってみれば、自分の中でやり遂げたこともいくつもあった充実した一年間であったのではないのでしょうか。「やり遂げることはできた」という思いは、必ず次の成長につながります。「今、この時」の自分の頑張りは、未来の自分の姿につながっているのです。

卒業式の式辞で、高校生活に別れを告げて新しい世界へと巣立っていく卒業生に、真壁仁の「峠」という詩を贈りました。皆さんは覚えていますか。私はその詩の中でも「峠道を上りつめた者は、のしかかってくる青空に身をさらし、やがてそれを背にする。風景はそこで綴じ合っているが、一つを失うことなしに、別の風景に入ってゆけない」という言葉が好きです。峠にさしかかった旅人が、のしかかってくる青空という未来の希望を受けながらも、下り坂を進んでいくためには、今までの楽しかった生活や思い出という青空と別れなければなりません。人生の区切りは、学校生活の区切りのように何度でも訪れます。別れを経験するたびに、人は成長していくのだと思います。真壁仁は、「一つの風景を失うことなしに、別の風景に入ってゆけない」という一つの真実を語っていますが、実は、もう一つ真実を訴えているのです。上り坂と下り坂、道の様子は違っても、また、たとえそこが過去と未来の別れの場所であったとしても、道は途切れることなく続いているということです。今まで歩いてきた道に対する誇り、それがすなわち自分自身の歴史なのです。今の苦しい生活も、明日の自分の成長につながっているということです。四月から新しい学年へと進級しますが、「今、この時」の自分をしっかり見つめて、新しい学年へと歩みを進めていってほしいと思います。

新年度に向かって、前を向いて歩いていく皆さんにこの言葉を贈ります。「太郎を呼べば太郎が来る」という言葉です。この言葉は、「花子を呼んでも太郎は来んなあ。太郎を呼べば太郎が来るよなあ。だから、いい太郎を呼びなさいよ」という意味です。川柳作家、時実新子さんが言っていた言葉です。失敗したらどうしよう、恥をかきたくないなあ、自分には無理……。いつの間にか悪い花子ばかり呼んでいる自分はいませんか。辛いとき、苦しいとき、うまくいかないとき、そんな時こそプラス思考。もちろん太郎を呼んだからと言って太郎が来てくれるとは限りませんが、花子を呼んでいけば、絶対に太郎は来てくれません。太郎は幸せの代名詞なのです。いつどんな時にもプラス思考で太郎を呼び続けましょう。「太郎を呼べば太郎が来る」素敵な太郎を呼んでください。きつとうまくいきます。

来年度は本校105周年となります。新しい時代を開くべく皆さんが、明るい未来へと、前向きに進んでいってくださることを願い、式辞といたします。 (令和4年3月18日)